
アスタロト

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アスタロト

【Nコード】

N5525G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

恋愛成就の為に悪魔を召喚した。けれどこの悪魔が日本人に対してとても冷淡で。コメディタッチの恋愛ものです。悪魔が主役になっています。

第一章

アスタロト

部屋は異様な雰囲気支配されていた。

部屋の中央には魔法陣が描かれその周りにはなにやら様々なものが置かれている。塩があれば松ヤニにもある。その他にも何かの内臓や死骸らしきものもある。そしてその魔法陣から離れた場所に結界がありそこに黒い髪に学生服の男の子がいた。彼はそこでやけに古い本を開いてそのうえでブツブツと呟っていた。

「我は求め訴えたり」

呪文のようである。

「我が元に来たれ魔界の王の一人にして偉大なる大公」

次にはこう言う。

「アスタロトよ。我が前にその姿を現わせ」

その言葉が終わると共に魔法陣から氷の柱があがりそれを壊したうえで巨大な竜が姿を現わした。見ればその竜の背に誰かがいた。

黒い服でその身体を包んだ天使である。翼は黒く王冠は黄金で髪は長く豊かだ。そのうえ黒い瞳を持つ顔は流麗で女なのか男なのかわからない程だ。

右手には蛇を持ちその手の爪は紅く禍々しく伸びている。その天使が姿を現わしたのであった。

「私を呼んだのは御前か？」

天使は血で染めたその唇で少年に問うた。

「このアスタロトを呼んだのは」

「そうだ」

彼は何とか落ち着きを保ちつつ彼に応えた。

「僕だ」

「名前は何かという？」

「椿谷榮一」

彼はこう名乗った。

「これが僕の名前だ」

「椿谷だと？」

その名前を聞くと急にこの魔王、アスタロトの態度が一変した。

「若しかして御前は日本人か」

「そうだが？」

「またか」

アスタロトは彼が日本人と聞くと何故かうんざりとした声をあげた。

「日本人か。また私に何の用だ」

「何の用だって」

「最近日本人の召還者がやたらと多い」

彼は次にこう言った。

「しかしだ」

「しかし？」

「御前もどうせそうだと思うが日本人は我々悪魔を悪魔と思っ
てはいない」

これは実に奇妙な言葉であつた。

「違うか？」

「悪魔だから召還したんだけれど」

「そういう意味ではない」

困ったような顔になった榮一にまた言った。

「我々を神のそれとは異なる正義を主張していると考えているな？」

アスタロトは単刀直入に彼に問うた。

「そうだな。間違いあるまい」

「まあね」

そして彼の方もそのことを認めた。

「それで何かおかしいの？」

「悪魔は悪だ」

考えてみれば当然の理屈を出してきた。

「悪を為すから悪魔だ」

「けれど失樂園とか読んだらあの神の行動はかなり問題があるじゃないか」

榮一も榮一で負けてはいない。

「それを見たらどっちが正義か悪かわからないよ」

「日本人は正義が幾つもあると思っているな」

「百人いたら百人の正義があるよ」

その日本人の榮一もそれを認める。

「そういうものじゃないの？」

「だから嫌なのだ」

アスタロトはここまで話したうえでまた述べた。

「日本人に呼ばれるのはな。我々を悪とは思っていないのだからな」

「だったら来なかったらいいのに」

「召還されたら来なくてはいけない」

声がまたしても無然としたものになった。

「それが悪魔の掟だ。掟に逆らうわけにはいかない」

「じゃあ話を聞いてくれるよね」

榮一はその無然とした彼に対して尋ねた。

「だから呼んだんだし」

「断るわけにもいかない」

アスタロトの声はさらに不機嫌さを増していた。

「それで何だ？」

そのうえであらためて彼に問うた。

「用件を聞こう」

「実は好きな人がいてね」

「ふむ」

ここでは榮一の話を目に聞いていた。

「それで力を貸して欲しいんだ」

「そういう話も苦手ではないが」

アスタロトは恋愛の話を持ち出されてまずはこう述べた。

「だが。より得意な者もいるだろうに」

「シトリとかゴモリーとか？」

「わかつているではないか」

どちらも魔王である。シトリは豹の頭に鳥の翼を持つ男の姿をしておりゴモリーは駱駝に乗った赤毛の美女だ。どちらも恋愛成就を得意分野としている。

「そちらを呼んだ方がいいと思うがな」

「それがね」

ところがここで彼は言うのだった。

「その娘の趣味が変わっていてね」

「日本人そのものが変だがな」

「それでね。彼女が言うんだよ」

ここではアスタロトの言葉は奇麗にスルーしていた。

第二章

「発明の才能がある人じゃないければ付き合えないって」

「それで私を呼んだのか」

「確か貴方の得意分野だったよね」

またアスタロトの顔を見てその彼に問うた。

「発明とかそういうのって」

「確かに」

アスタロトもそのことを隠すことはなかった。

「わかってるようだな。発明やそういった類のことは私の得意とするところだ」

「だからさ。力を貸して欲しいんだ」

彼はあらためてアスタロトに告げた。

「その力。僕に発明の力を授けて」

「御前にか」

「できるよね。そうしてもらいたくて呼んだし」

「まず結論から言おう」

アスタロトは冷静な口調になって前置きからはじめた。

「できる」

「そう、よかった」

「何度も言うが発明は私の得意分野だ」

このことも強調する。

「従って御前にその才能を授けることも可能だ」

「そう。だったら」

「すぐに教えてやろう。発明の才能をな」

召還した要求に関すること自体はすぐに話がついたのだった。

榮一はこのことにまずは安心して喜んだ。しかしアスタロトはその彼に対して不機嫌な顔に戻ったうえでこう言ってきたのである。

「しかしだ」

「どうしたの？」

「御前の魂はいらん」

何故かこう言うのである。

「御前達日本人の魂は魔界では断ることになった」

「あれっ、どうしてなの！？」

これには榮一も驚きを隠せなかった。悪魔と契約したならば自分の魂をその代償とする、これは黒魔術を行ううえでの基本であるからだ。それを向こうから断られて榮一も驚きを隠せなかった。

「魂はいらないなんて」

「日本人は我々を悪とは思っていない」

またこのことを言うアスタロトだった。

「そしてその魂が魔界に行ってもだ」

「うん」

「御前は知っているかもしれないが悪魔に魂を売ったならばその者は我々の世界である魔界において我々に永遠に仕えることになっている」

「そうだったよね、確か」

「我々もそのつもりで日本人と契約した」

アスタロトは言う。

「ところがだ」

「ところが？」

「彼等は魔界で我々に仕えはする」

そのこと自体は問題がないようである。

「しかしそれについて何も思わない」

「そうなんだ」

「御前も間違いなく同じだ。魔界に生まれ変わったと思ってそこでもこれまで通り暮らしている。我々に仕えはしているがそこに恥とか罪悪感といったものは全くない」

「悪魔に生まれ変わったってだけじゃないの？」

榮一はこういうふうに考えていた。悪魔に魂を売ることを。

「奴隷っていつでも高価な存在だから邪険にはしないだろうしね」

「まあそれもあるが」

実際に奴隷は何時の時代もかなり高価な存在であった。ローマ帝国でもそうであるしアンクル・トムの時代でも本当はそうであった。だから無下に虐待するということはまずなかったのである。

第三章

「召使というか社員みたいなものだよね。だったら」

「そういう考えで魔界に生まれ変わったと考えて平気で暮らしている。他の過去の者達がそのことに後悔したり恥じたりしているのだ。しかも」

「しかも？」

「そこでも神や仏を拝む」

「そういうこともしているらしい。」

「神といっても神社か。日本の神々だな」

「ああ、そっちね」

「榮一もそれを聞いて納得した。」

「そっちの方なんだ」

「神社や寺まで何時の間にかできてだ。しかも毎日朝から晩まで働いて休むことがない。我々が酷使するぞと脅す前にもう自分から働く」

「日本人だからね」

「そんな連中の魂はいらん」

「ここまで話してまた彼に告げた。」

「そんなものこれ以上はいらん。今いる連中もまとめてそちらの神か仏の世界に送り返したいと考えている位だ」

「そこまで嫌なんだ」

「わかったな。だから御前の魂はいらん」

「そしてまた榮一に告げたのだった。」

「絶対にな。それは絶対に受け取らないからな」

「わかったよ。じゃあそれはいいよ」

「うむ」

「魂の話はこれでなくなった。」

「じゃあ。何がいいのさ」

「それは後で考える」

「後でって」

「とにかくだ」

アスタロトはかなり面倒臭そうに彼に告げた。

「発明の才能だな」

「うん」

「これを読め」

早速一冊の本を懷から出して彼に投げ付けたのだった。

「この本をな。そうすればそれで御前は発明の天才だ」

「この本を？」

「既に日本語訳もしてある」

「早いね」

「元はラテン語だった」

「どうやらそうらしい。」

「それを訳しておいた。さっさと読め」

「とにかくこれを読めば僕も発明の天才になれるんだ」

「大天才とか超天才になりたければ他にもまだ本がある」

「あるんだ」

「まずそれは入門編だ」

見てみれば確かに表紙に入門編とある。タイトルは『君にもできる！脅威の発明』というどうにも胡散臭さも感じられるものであった。

「そしてだ。発展編に上級編もある」

「上級編まであるんだ」

「上級まで読めばダブルビンチになれるぞ」

「あのルネサンスの！？」

「それかエジソンだ」

「うわ、そこまで」

「それでどうするのだ？」

ここまで話してまた榮一に問うのだった。

「とりあえず入門編は貸しておくがな」

「貸してくれるんだ」

「別にコピーしてもいい」

この辺りは随分寛大だった。

「その金は御前持ちでな」

「コピーするお金位お小遣いでどうにもなるけれど」

「だったらそれは好きにしろ」

やはりこの辺りは気前がいいと言えた。

「貸すだけだからな。大切にするようにな」

「わかったよ。それじゃあ」

「もうついでだ」

やはりアスタロトの口調は面倒臭そうだった。日本人の相手をするのが相当嫌らしい。

「後の二冊も貸してやる」

「あっ、有り難う」

榮一はここでさらに二冊受け取った。見れば確かに表紙に発展編だの上級編だの書いてある。やはり胡散臭さは感じられるものだった。が。

「じゃあ読ませてもらうよ」

「これで発明の才能は大丈夫だ」

アスタロトは彼に告げた。

「その彼女か」

「うん、彼女」

「御前が発明ができるようになればそれで来てくれるのだったな」

「間違いなくね」

「ではそれが成就した時にだ」

強引に自分から話を仕切るアスタロトだった。

第四章

「また会おう」

「その時まではどうするの？」

「呼ぶな」

こうである。

「絶対に呼ぶな。いいな」

「呼んだらどうするの？」

「御前は死ぬ」

脅しではなかった。本気そのものの言葉の調子だった。

「私も忙しい」

「そうなんだ」

「魂に何の価値もない日本人の相手をする程時間は暇じゃない」

「何箇所も同時に召還されても平気だったんじゃないの？」

榮一はさりげなく密かな秘密に突っ込みを入れた。

「分身とか使えるから。それで」

「悪魔のことをよく知ってるな」

「まあ一応勉強はしたから」

そのの辺りは抜かりがないのだった。

「知ってるけれど」

「では言葉を代えよう」

アスタロトはさらに不機嫌になって彼に返した。

「面倒臭い」

「凄い理由だね」

「というよりか日本人の相手をするのは嫌だ」

もっと物凄い理由であった。

「わかったな。以上だ」

「だから呼ぶなってことなんだ」

「話が済めば私の方から行く」

とにかく呼ばれたくないアスタロトだった。

「それだけだ。わかったな」

「じゃあ僕が彼女の心をゲットしたら」

「その間に魂の代わりに貰っておきたいものは考える」

彼はこのことも榮一に告げた。

「ただ言っておくがその彼女やら御前の家族の魂は要求しないからそれは安心しろ」

「どうしてなの？それは」

「その彼女も御前の家族も日本人だな」

うんざりとしたような口調で彼に問うのだった。

「そうだな。違うか？」

「全く以てその通りだけれど」

「じゃあいらん」

こういう理由だった。

「だからだ。とにかく日本人の魂はいらん」

「そうなの」

「だからだ。それはないから安心しろ」

また言うのだった。

「とにかく代償は考えておく。それではな」

こう最後に告げるとそのまま何処かに消えて魔法陣から姿を消してしまった。まるで嫌なものの中から消え去るような。そうした消え方だった。

「何か日本人って悪魔からかなり嫌われてるんだ」

榮一にもそれはわかった。

「まあとにかく」

しかし彼はそれはどうでもよかった。それよりだった。

早速本を開き読みはじめた。そうして発明の才能を身に着けていく。全三巻読み終えた彼はまさに超天才になっていた。これにより得たものは。

今日も学校の帰り道にデートだった。まるでアイドルのように可

愛い女の子と並んで歩いている。その女の子にあるものを見せていた。

「それでね。これがね」

「あつ、奇麗な腕時計ね」

「僕が作ったんだ」

こう話すのだ。見れば見たこともないような立派でかつ奇麗な時計である。

「この時計ね」

「ええ」

「奇麗なだけじゃないよ」

こう彼女に話す。

「実はね」

「何かあるの？」

「ここをこうすれば」

時計の端にある小さなボタンを押す。すると。

「ほら」

「あつ、携帯!？」

「うん、携帯電話にもなるんだ」

こう彼女に言うのだった。

「こうすればね。凄いでしょ」

「腕時計で携帯になるの」

「それだけじゃないよ」

まだあるのだった。

「こうやって光らせることもできるし」

「光ったりもするの」

「そういう塗料なんだ」

どうやらそうらしい。

第五章

「どうかな、これって」

「夜道歩く時はそれが車にわかるのね」

「小さいけれどね」

そのことには苦笑いを浮かべる。しかしだった。

「それでもね。その光が強いから」

「はつきりわかって」

「そう。大丈夫だよ」

こう彼女に話すのである。

「夜道でもね」

「それってかなり凄いいんじゃないの？」

「あとは」

彼はまだ言うのだった。話はまだ続いた。

「ここを押したら」

「ええ」

また時計に出ている小さなボタンを指し示す。それはさっきのボタンとはまた別のボタンだった。そのボタンを指差して説明するのである。

「ブザーが鳴るんだ」

「今度は防犯用ね」

「どうかな」

ここまで話したうえであらためて彼女に問うた。

「この時計。どう思う？」

「いいじゃない」

彼女は満面の笑顔で彼に応えた。

「この時計。とてもいいわ」

「気に入ってくれたね」

「ええ。とてもね」

またその笑顔で彼に答えるのだった。

「いいと思うわ」

「よかったらどう？」

さりげなくとはいかないがプレゼントしようというのだった。

「この時計。よかったらあげるけれど」

「けれどそれは」

この申し出には少し足を引いている彼女だった。

「前もあの変身できる携帯電話貰ったし」

「あれね」

「だから。今はね」

「いいの」

彼女の返答を聞いて言うのだった。

「この時計は」

「そうそう何でも貰ったら悪いわ」

彼女はまた榮一に答えた。

「だからね。今はね」

「いいの」

「気持ちだけ貰っておくわ」

何度も断るのだった。こうして彼女はこの時計は貰わなかった。

暫くして榮一は彼女と別れて自分の家に向かった。一人になるとすぐ。

「いい娘だな」

アスタロトが出て来た。竜に乗ってそのままの格好で道の真ん中にいた。

「今時珍しい。無欲な娘だ」

「その格好で外に出るんだ」

「悪いか？」

全く悪びれた様子がない。

「これが私の本来の姿だが」

「人に見られたら大騒ぎになるんじゃないの？」

「そういえばそうだな」

言われてそのことにやっと気付くアスタロトだった。

「まあいい。今は人もいない」

「それはそうだけれどね」

二人が今いる道には確かに誰もいない。誰かいれば出て来た瞬間に大騒ぎになってしまうのは必定だからこの点では運がいいと言えた。

しかしだった。彼は結局変身することなくそのままの姿で榮一に話をしてきた。その話は。

「例の件だが」

「魂の代償だね」

「そうだ。何度も言うが御前の魂はいらん」

このことはそれこそくどいまでに主張するアスタロトだった。

「というよりかは御前等日本人は魔界に来るな」

「ちえっ、来世じゃ魔界で面白おかしく過ごそうと思ってたのに」

「それがいかんというのだ」

やはり彼はこんなことを考えていたのだった。アスタロトは彼の話を聞いてやはり、と思った。それもしっかりと顔に出ていた。

「だからいらん。いいな」

「わかったよ」

「わかっていてもいなくてもいらんからな」

とにかくこのことは主張してやまなかった。そのうえでさらに話を進めてきた。

「それでだ」

「それで？」

「話を元に戻す」

強引に話を戻しにかかってきた。

「代償だが」

「何にするの？それで」

「その時計を寄越せ」

先程彼女に説明し今彼が左手に着けているその時計を右手に持っている蛇で指し示した。その蛇はじつと時計を見て目を離さない。

第六章

「それをな。それでいい」

「この時計で？」

「とりうあえずあの女の子はいいと言っていたな」

「聞いていたんだ」

「悪魔の耳は地獄耳だ」

言葉は少し誇らしげだった。

「このことはよく覚えておけ」

「覚えてくれど」

「そのうえ目は千里眼だ」

こうも言い加えてきた。

「だからだ。何でもわかるのだ」

「どうか覗き見してたんじゃないの？」

しかし榮一の見方はシビアであった。

「物陰からそつと。そうじゃないの？」

「だが地獄耳に千里眼は持っているぞ」

ズバリ指摘され苦しい顔になるアスタロトだった。

「そしてだ」

「けれど覗き見はしていたんだ」

「ええい、話を進めるぞ」

今度は業を煮やした感じになっていた。やはり榮一に対して分が悪
い。

「その代償だが」

「この時計ってこと？」

「そう。その時計だ」

あらためて榮一が今左手に着けているその時計を蛇で指し示して告
げた。

「その時計を貰い受けよう」

「この時計でいいんだ」

「とりあえずそれでいい」

投げやりな言葉ではある。

「それでな。貰ったらもうそれで御前の話は終わりだ」

「こんなのでいいなんて」

「御前等の魂よりはずっとましだ」

「そんなに僕達の魂って価値がないんだ」

「価値がないのではない」

アスタロトはそのことは訂正させた。

「しかしだ」

「しかし？」

「いらん」

こう言うのである。

「ただ邪魔なだけだ。いいな」

「わかったよ。それだったら」

「うむ。貰おう」

時計は勝手に榮一の手から離れアスタロトの手に渡った。彼はその時計を左手に見てからそのうえでまた榮一に顔を向けてきた。

「これで私と御前の話は終わりだ」

「うん」

「二度と呼ぶな」

無然とした顔で告げる。

「二度とな。いいな」

「また何かあったら呼びたいけれど」

「せめて日本人でなくなっただけにしろ」

あくまで日本人には呼ばれたくないのであった。

「いいな。我々もまた一つの正義だと」

「だから百人いれば百人の正義があるから」

「その主張がわからん」

悪魔にはどうしても我慢ならない主張なのであった。何故なら彼

等は自分達が悪であることをそのアイデンティティとしているからである。

「全く以てな」

「とりあえずもう呼ぶなってことなんだね」

「呼んだらただではおかん」

その黒い髪が風で揺れていた。しかし何故か風は右から左なのに髪は毛は左から右に動いている。それが極めて不自然であった。

「いいな」

「それはわかったけれど何で髪の動きと風の動きが逆なの？」

「私はこちらに髪をたなびかせるのが好きなのだ」
だかららしい。

「それだけだ。気にするな」

「それはわかったよ」

「とにかくだ。呼ぶな」

このことをあくまで言うのだった。

「呼ぶなら他の魔王を呼べ。もっとも他の仲間もそれは同じだがな」

「本当に嫌われてるんだね、日本人って」

「悪魔を悪ではない。全く変わった奴等だ」

こう言いながら首を捻るばかりだった。しかしそうは言ってもその顔はそれ程不機嫌なものではなくなっていた。そのうえでまた榮一に言ってきた。

「一度機会があったらじっくりと調べてみたいものだ」

「何なら協力するけれど？」

「御前はいい」

彼の申し出はきっぱりと断るのだった。

「とりあえずこの時計で満足しておいてやろう。それではな」

「うん」

「さらばだ。彼女とは楽しく過ごすようにな」

最後にこう言い残して榮一の前から姿を消すのだった。魔王は彼の時計だけ貰って帰るのだった。後にはとりあえず彼の彼女と仲よ

くするようにとの言葉を受け取ってそれに従おうと誓うのだった。

アスタロト 完

2009・2・24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5525g/>

アスタロト

2010年10月8日14時43分発行